

行政職員に心のケアを

多忙極める被災者支援業務

東日本大震災 沖縄と熊本の病院が面談

津波被害が大きかった岩手県宮古市田老地区で、国立病院機構琉球病院(沖縄県)と菊池病院(熊本県)の「こころのケアチーム」が、被災者の支援に当たっている行政職員や避難所運営者の心のケアを続けている。既に100人以上が受

診し、これまでに重症者はいなかったというが、ケアに当たる精神科医の大鶴卓さん(37)は「支援者は『支える』『助げる』といった意識が高い」と分析。私生活とのバランスを取るよう助言する

【安藤いづ子】

田老地区の避難所になつている保養施設「グリーンピア三陸みやこ」の一室。市の田老診療所で働く看護師、山本ヒデさん(45)はケアチームの精神科医と面談した。

山本さんは津波で家を流され、消防団員の夫幸雄さん(49)は水門の確認に向かったまま行方不明。震災直後から救護班として活動し

いの言葉をかけられ、涙がこぼれた。仕事と家族、どちらも大切。バランスをとってみては。アドバイスに生きるヒントをもらっ

たと、前向きに考えるようになったという。グリーンピアを運営

岩手・宮古市

ていたため、家の確認や幸雄さんを探すこともできなかった。「家族のために仕事をしてきたのに、肝心な時に何もしてあげられない」。自分を責めながら仕事を続け、不眠になった。

面談で、抱えている不安や悩みを打ち明けた。被災者でありながら、看護師の仕事全部をこなしている「こころの

する財団の専務理事、赤沼正清さん(70)も田老診療所の医師、黒田仁さん(42)から「声に元気がない」と受診を勧められ、心理士と面談。PTSD(心的外傷後ストレス障害)を判断するチェックシ

トをもとに「ストレス度は高くない」と言われて「心の専門家から合格点をもらったよ」とホッとした表情を見せた。黒田さんは「支援者は業務で忙しく、希望制ではなかなかケアが進まない。上司が

率先して全員受診を目指すべきた」と話す。こころのケアチームは精神科医、看護師、心理療法士、精神保健福祉士らで編成され、国立病院や都道府県が厚生労働省を通じて派遣している。厚生省

によると27日現在、岩手、宮城、福島、3県で29チームが活動。岩手県関係者によると、津波に流されそうになった職員が震災後の激務もあって体調を崩し、登庁できなくなったケースもあるという。